

大正・昭和戦前期農村旧制中学校と小学校における郷土教育実践の連携

板橋孝幸

(奈良教育大学 学校教育講座(教育学・教育史))

The Practices of the Community Education during in 1920-30's:
Focusing on Partnership with Former Junior High School and Elementary School in Rural Areas

Takayuki ITABASHI

(Department of Education, Nara University of Education)

要旨: 本稿において、大正・昭和戦前期農村における旧制中学校と小学校の連携に着目し、そこで展開された郷土教育の実践を分析した。事例として、埼玉県北埼玉郡不動岡村(現加須市不動岡地区)を扱った。農村の郷土教育を国家の教化政策、あるいは郷土教育連盟理論の受容対象と捉えられてきた従来の研究に対し、農村旧制中学校では、「農村幹部」養成に力点を置き、地域小学校と連携しながら主体的な実践を行っていたことが、旧制不動岡中学校の郷土教育を検討することにより明らかになった。旧制中学校では、中等教育的機関(実業補習学校等)・小学校における郷土教育とは異なり、「農村幹部」養成に1つの特徴があった。

キーワード: 郷土教育 community education

農村旧制中学校 former junior high school in rural areas

農村小学校 elementary school in rural areas

はじめに

本稿の目的は、大正・昭和戦前期農村における旧制中学校と小学校の郷土教育実践に着目し、そこで展開された両校の連携について明らかにすることである。事例として、埼玉県北埼玉郡不動岡村(現加須市不動岡地区)を検討する。同村には、農村に位置した全国的最も古い旧制中学校の1つである不動岡中学校が存在した。不動岡小学校も、不動岡中学校と距離的にも近く、密接な関係を持っていた。こうした理由から、不動岡村の旧制中学校と小学校の連携を検討する事例として取り上げることとする。

昭和戦前期郷土教育の先行研究は、1980年代までと1990年代以降で大きく異なっている。1980年代までの多くの研究は、「文部省・師範学校系」と「郷土教育連盟系」という官民の二項対立論による枠組みを踏まえておこなわれてきた¹⁾。これに対して、1990年以降の研究では郷土教育連盟(以下、連盟と略称)と文部省の郷土教育論は対立するものでなく、両者が協力する中で運動の啓蒙・普及をはかっていたことが明らかにされている²⁾。こうした体制側の教育政策とそれに対抗した民間教育運動という枠組みの継承・再検討が研究の中核になっていたため、文部省、師範学校、連盟などの理論的指導者、そうした指導者に評価された

師範学校・同附属小学校と都市の小学校が先行研究の主要な検討対象となってきた。昭和恐慌が深刻化した1930年代、盛んに郷土教育が提唱され、農村において熱烈に歓迎されたといわれているにもかかわらず、先行研究では農村の学校における郷土教育の実態をほとんど明らかにしてこなかった。さらに、これまで昭和戦前期の郷土教育研究は、初等教育・運動史・学習論・郷土研究が中心であった。近年、中等教育段階の師範学校における教員養成の教育方法としても研究が行われているが³⁾、地域のリーダー養成として重要な役割を果たしていた農村の旧制中学校は検討されてこなかった。

そうした研究動向の中で、農村小学校、師範学校、同附属小学校、県学務課が模索していた郷土教育については明らかされてきている。村内教育体制の構築とカリキュラム改造構想の背景には、当時の農村における近代化・合理化と村秩序が持っていた自己拘束的規制という二重性が存在した。教育実践もその中で展開された。つまり、農村自治や生活改善に内包される近代的社会連帯思想と、村や集落の行動規範に体现された社会維持機能についての理解とその実践・行動化が、初等教育から成人教育までを対象とした農村郷土教育の学習内容であった⁴⁾。師範学校・同附属小学校はカリキュラム改造に力点を置き、精神陶冶の実践を

深めた。これに対して、農村小学校は村内教育体制の構築を目指し、「地域振興」策の方途を組み入れた教育を展開していた。国や県のねらいとは異なり、農村小学校は農村の二重性を踏まえ、よりよい地域社会の構築を志向できる人材の育成を郷土教育において実践していたのである⁵。

さらに、農村小学校の郷土教育について研究が進む中で、小学校の教師や農村の行政担当者は、「農村幹部」をいかに養成するかということに力点を置いて郷土教育を構想していたことが明らかとなってきた。宮城県中田村における事例では、小学校より上位の教育機関である実業補習学校や青年訓練所とは別に、高等小学校卒業を要件とした中田中等学園という独自の教育機関を設置して「農村幹部」の養成をしようとしていた⁶。つまり、農村においては地域のリーダー層を育成するために、中等教育機関あるいはそれに相当する中等教育的機関⁷を必要としたと考えられる。

こうした研究成果を踏まえ、本稿では中等教育、とりわけ旧制中学校における郷土教育の取り組みに着目する。人材育成を目的に地域の初等・中等教育機関が連携した事例として、不動岡村に位置していた旧制中学校と小学校の事例を検討する。本稿で取り上げる埼玉県北埼玉郡不動岡村（現加須市不動岡）は、関東平野のほぼ中央部を占める埼玉県北東部に位置している。地形は、利根川などの河川によって運ばれた土砂の堆積作用によって、大部分が平坦な沖積低地により形成されている。主な産業は農業であり、不動岡村は1928（昭和3）年に不動岡町となった地域である。

1. 旧制不動岡中学校における郷土教育的取り組み

私立埼玉英和学校（現県立不動岡高等学校）は、1886（明治19）年4月の中学校令に準拠した埼玉県で最初の中学校として、同年11月11日に創立された。同校は、1921（大正10）年に県立移管し、埼玉県立不動岡中学校と校名を変更するが、この間、下記の表1にあるように4回の校名変更をしている。

同校の成立期については、新井淑子が「同校の成立以前に、不動岡を舞台にした中学校設立の動きがあり、それらは国や県の教育政策の影響をもちに受けている。それでは、同校の学校設置者たちは、教育政策の変更をどう受けとめ、私立校を設置したのか、その運営等を通して同校の設立経緯をみることは、当時の同地域の農村指導者層がどんな教育要求をもち、それをどう実現させたのか」⁸といった問題意識から研究を行っている。新井は、私立埼玉英和学校の設立過程をつうじて、教育制度の改変における地域の対応として、「学校の諸行事が、学校の枠を越え、株主たちを中心とした近隣の小学校をも含む地域ぐるみの活動として展開されてきた」⁹ことを明らかにしている。新

井の研究から、不動岡中学校の成立期に、小学校の教師・児童とさまざまな関わりがあったとわかる。昭和戦前期には郷土教育運動が全国的に展開されたことから、さらに周辺小学校や地域との連携が行われたと考えられるが、成立期以降については分析されていない。そこで、本稿では周辺小学校や地域と連携して郷土教育的な取り組みを進めた大正・昭和戦前期に焦点をあて、不動岡中学校の実践を検討する。

1931（昭和6）年に中学校令施行規則が改正される。これは、旧制中学校の郷土教育的取り組みに一定程度の影響を与えたものと考えられる。この改正による学科目および毎週授業時数は、表2のようなものであった。1931（昭和6）年1月10日、文部省は中学校令施行規則を改正し、4月から全国の中学校において実施に移した。

この改正は1919（大正8）年の中学校令改正以来のものであり、文部省は「教育を地方の実際に適合せしめんがため、努めて画一的形式を打破し、公民的精神と共に勤労節制の習性を養ひ、特に国体観念を明徴ならしめんことを期しているのです（昭和3年6月地方官会議）」と改正のための眼目を設定していた。これは中学校教育調査委員会の審議を経てのち、文政審議会に諮問され、文部省に答申される。しかし、基本的には文部省の眼目とおおむね変わるところなく、これが中学校令改正の基本精神になった。

主な改正点は、次の3つであった。第1は、道徳教育及び国民道徳を施し、生活上有用な知能を養う点について強調していることである。第2は、生徒の卒業後の進路を考慮して、第一種・第二種の課程を編成し、その一課程を選修させるコース制を導入した点である。学科目を基本科目と増課科目との2つに分けて、基本科目においては普通教育として共通に必要な知識技能を受け、増課科目においては生徒の能力、趣味、志望、土地の状況により適当に選択履修するものとした。そして、第一と第二の課程は第4学年以上（第3学年でも可）において編成することとした。これは、1899（明治32）年改正による中等教育の複線化を一層推進したものであり、不動岡中学校の場合は、1925（大正14）年よりこれに似た編成を実施しており、第一種に似た課程は「実業組」などと呼ばれていた¹⁰。第3は、学科目の改正である。「公民科」を設けて従来の「法制及経済」を廃止、園芸、工作、その他の作業を通して実生活の知識と勤労愛好の精神を養う「作業科」の新設、従来の博物、物理、化学を総合して実際生活上有用な知能を与えるために理科と改称した。この改正規則は、太平洋戦争下の1943（昭和18）年1月21日における新たな中学校令の交付に至るまで若干の改定を伴いながら実施された。

不動岡中学校においても、1931（昭和6）年度入学の生徒からこの新課程を実施し、この生徒たちの第4

表1 旧制不動岡中学校沿革

1886 (明治19) 年	11月 「私立埼玉英和学校」を北埼玉郡不動岡村岡古井に開設 11月11日「私立埼玉英和学校」を開校
1890 (明治23) 年	4月 第1回卒業式を挙行
1894 (明治27) 年	7月 「私立埼玉和英学校」に改称、本科修業年限を5年とする
1897 (明治30) 年	4月 「私立埼玉尋常中学校」に改称、校章(勾玉に中)を制定
1899 (明治32) 年	4月 「私立埼玉中学校」に改称
1908 (明治41) 年	8月 経営困難につき、県費補助増額を請願
1910 (明治43) 年	11月 私立埼玉中学校創立25周年記念式典を挙行
1921 (大正10) 年	4月 埼玉県へ移管「埼玉県立不動岡中学校」と改称
1924 (大正13) 年	3月 新築校舎(現在地)に移転する
1925 (大正14) 年	4月 「実業組」を設置 5月 第1回郡内小学校陸上競技会及びドッチボール大会を本校で開催
1926 (大正15) 年	1月 寄宿舎一棟を全焼
1927 (昭和2) 年	10月 講堂竣工
1928 (昭和3) 年	1月 開校40周年祝賀会挙行
1931 (昭和6) 年	4月 中学校令改正に伴い、第4・5学年に第一種及び第二種の課程を設置
1936 (昭和11) 年	11月 創立50周年記念式典を挙行「創立50周年記念誌」発行
1940 (昭和15) 年	4月 入学考査改正(筆記考査を廃止し、運動能力・口頭試験・身体検査を実施)
1943 (昭和18) 年	4月 修行年限短縮により4年制となる
1944 (昭和19) 年	4月 県立中学校区制決定、運動部は柔剣弓道のみで他は中止 7月 学徒動員命令、3年生から5年生は動員のため一週間に一日登校
1945 (昭和20) 年	3月 学校は日立の分工場となり、1・2年生は工場作業に従事 8月 終戦、授業再開(半日)、軍事関係図書の廃棄などの教育刷新
1946 (昭和21) 年	4月 修業年限を5年に延長(旧制中学最後の入学式) 11月 創立60周年記念式、祝賀会を挙行
1947 (昭和22) 年	4月 学制改革により併設中学校設置
1948 (昭和23) 年	4月 「埼玉県立不動岡高等学校」と改称 6月 不動岡高等学校応援歌(宮澤章二作詞、宮原貞二作曲)を制定 8月 定時制課程の分校設置(菖蒲、羽生、北川辺)、新校章を制定
1949 (昭和24) 年	2月 火災に遭い校舎の大部分を焼失 3月 卒業式を校庭で実施(旧制中学最後及び新制高校第1回)

(埼玉県立不動岡高等学校創立百周年記念誌編集委員会編『創立百周年記念誌 不動百年』埼玉県立不動岡高校創立百周年記念事業協賛会、1985年より筆者作成)

学年進級時から第一種と第二種の組分けを行った。学校では慎重を期し、生徒より数回にわたる志望の調査をし、さらに第3学年の2学期に父兄会を開き、新課程の趣旨をよく説明し、本人の能力、健康、志望等につき相談をし、第一種課程、第二種課程のいずれかを選択させた。3月末に組編成を行い、第一種組(4年1組)30人、第二種組(4年2組)41人、(4年3組)44人の組分けをした¹¹⁾。この時の不動岡中学校における学科課程は、表3のようなものであった。基本科目の作業科に加え、第4・5学年の第二種課程に、実業科を週3時間設定したことがわかる。

本稿では郷土教育的取り組みに着目するため、第一種組を検討する。前述したように、不動岡中学校では1925(大正14)年度頃から実業組という名において、中学校令と似通った組分けを行っていた。当初は農業を担当する専門の教員はおらず、実習地もなかった。しかし、旧制の許す範囲で英語・数学等の負担を軽くし、国漢・法制経済を重んじて、珠算を課し、農業の簡単な実習等を課し、「5年1組村」などと呼んで町村自治体になぞらえて組の組織を作ったり、銀行・役

場・郵便局・各種工場等の見学をしたりして、少しでも卒業後実社会に立つに都合のよいようにと考えて第5学年に実業組をおいていた¹²⁾。そのような取り組みを既にしていたため、不動岡中学校では新課程の第一種第二種の実施においても不安なく移行できたようである。

組編成とともに新課程における大きな変化は、「作業科」の設置であった。「農具(作業用具)」及び工作の用具の購入は、1931(昭和6)年度に300円、1932(昭和7)年度に564円、1933(昭和8)年度に93円の3ヶ年にわたり購入を充実していった。その他に、収納舎(8坪)、堆肥水肥舎(3坪)が1931(昭和6)年に完成し、旧寄宿舎の一部(焼残った部分)を改造し、用具舎にあてることもできた。実習地は極めて狭かったが、1934(昭和9)年度より畑326坪を借入れ、1935(昭和10)年度より田210坪を借入れて徐々に広げていった¹³⁾。

不動岡中学校は北埼玉郡に位置しており、郡内の篤志家は創設以来、さまざまな支援を行ってきた。この時期、不動岡中学校では新制度によって作業に園芸を

表2 1931年中学校令施行規則改正による学科目および毎週授業時間数

	1年	2年	3年	4年		5年	
基本科目							
修身	1	1	1		1		1
公民科					2		2
国語漢文	7	6	6		4		4
歴史	3	3	3	3		3	
地理							
外国語	5	5	6				
数学	3	3	5				
理科	2	3	3		4		4
図画	1	1	1				
音楽	1	1	1				
作業科	2	2	1		1		1
体操	5	5	5		5		5
小計	30	30	32	20		20	
増設科目				第一種	第二種	第一種	第二種
国語漢文				1～3	1～3	1～3	1～3
外国語				2～5	4～7	2～5	4～7
数学				2～4	2～5	2～4	2～5
理科				1～4	1～2	1～4	1～2
実業				3～5		3～6	
図画				1～2	1～2	1～2	1～2
音楽				1～2	1～2	1～2	1～2
小計				11～15	10～12	11～15	10～12
合計	30	30	32	31～35	30～35	31～35	30～32

〔備考〕第4学年で第一種・第二種課程に分化する場合のみを表示。

表3 1931年中学校令施行規則改正による不動岡中学校の学科目および毎週授業時間数

種別	学年/ 科目	修身	公民	国語・ 漢文	地理・ 歴史	外国語	数学	図画	理科	音楽	作業	実業	体操・ 武道	計
第一種	4年	1	2	6	3	3	3	1	5	0	1	3	5	33
	5年	1	2	6	3	3	3	1	5	0	1	3	5	33
第二種	4年	1	2	5	3	5	4	1	5	0	1	0	5	32
	5年	1	2	5	3	5	5	1	4	0	1	0	5	32

(埼玉県立不動岡中学校内創立五十週年祝賀協賛会編『開校五十年史』埼玉県立不動岡中学校、1936年、64ページより筆者作成)

課するため、温室が欲しいと願っていた。そうしたところ、同郡忍町出身の大澤龍次郎が支援し、鉄筋コンクリートの立派な温室が1933（昭和8）年11月にできあがった。必ずしも大きな施設ではなかったが、設備は完備していて模範的なものであった¹⁴。農村に位置した不動岡中学校では、地域に支えられて発展してきたことがわかる。

以上のことから、不動岡中学校における郷土教育的取り組みの特徴として、次の2点をあげることができる。

第1点は、1931（昭和6）年の中学校令改正より早く実業組を設置していたことである。農村に位置する不動岡中学校では、農家出身の生徒が多かった。そのため、卒業後も家業である農業に従事するものが多くいた。早い時期から単なる進学準備教育だけでなく、実業教育も重視していたのである。そうした理由から、1931（昭和6）年の中学校令改正で示された教育課程

は、不動岡中学校の郷土教育的取り組みに合致していたといえる。これまでの研究から、農村の郷土教育では農業教育と公民教育が軸だったと明らかになっている¹⁵。中学校令改正によって、実業教育を重視して第一種の組編成をするようになるが、不動岡中学校は農村に位置していたことから農業教育を積極的に導入していく。「作業科」においても、同様に農業を重視していく。さらに、同改正では「公民科」を設け、従来の「法制及経済」を廃止して公民教育を重視していくが、これも農村郷土教育の動向と合致している。文部省の政策は農業教育と公民教育の重視であり、当時の農村郷土教育も内容の差異はあれ、この2つに重点を置いていたといえる¹⁶。

第2点は、農村に位置する中学校としての教育の特徴である。不動岡中学校では、単に普通教育を行う学校としての役割だけでなく、地域に根ざした農村幹部

養成としてのねらいがあった。農村に位置する不動岡村及び周辺地域において、不動岡中学校は最上位の教育機関であった。同校の卒業生は、地域において知的エリート層であったといえる。彼らは村に帰り、将来の地域を担うリーダーとして期待された。そのため、単なる進学準備教育だけでなく農業教育を行う教育課程が支持されたといえる。

2. 旧制不動岡中学校と周辺小学校との連携

不動岡村及び周辺地域では、早くから中学校と周辺小学校の連携が行われていた。『東京日日新聞』では、「不動岡中学の新傾向、付近小学と連絡研究」と題して1926（大正15）年12月5日に、下記のような記事を掲載している。

昨今漸く中学校と小学校との連携の実際研究が叫ばれて来たがほとんど農村の子弟をのみ収容する不動岡中学では早くもこの点に留意し現在の付近小学校との連絡研究の実際状況は県下稀に見る新傾向である。これは肥後川校長以下全職員や同校卒業師範二部出身の郡内奉職員等が特に農村教育に深い理解と同情を持っているため付近小学校の教員研究会には必ず不中教諭の講話研究指導のないことはなく、不中軍事教官丸岡大尉のごとき郡内連合教授研究会への出張講演に引張りだこの有様。また一方で不中では課外講話として三俣小学校長角田氏はじめ付近小学校長を講師として農村教育についての講話をきかしているほどであると¹⁷。

不動岡村及びその周辺地域出身の生徒たちは、「ほとんど農村の子弟をのみ収容する不動岡中学」とあるように、農村・農家出身の者が大半であった。そのため、前述したように不動岡中学校は、単なる進学準備教育だけでなく、農村幹部養成としての役割も担っていたといえる。こうしたことから、「肥後川校長以下全職員や同校卒業師範二部出身の郡内奉職員等が特に農村教育に深い理解と同情」を持っていた。大正末から実業組を設置し、農村への理解を深める教育を実践していたのも、生徒たちの出身を踏まえた教職員の地域理解によるものであった。

不動岡中学校からは、毎年多くの卒業生が埼玉県師範学校第二部へ進学していた。中学校卒業生を受け入れた師範学校第二部は2年間の小学校教員養成課程であり、その卒業生の多くは出身地域の小学校へ教員として赴任していった。不動岡中学校の卒業生で、埼玉県師範学校第二部出身の小学校教員は、母校である不動岡中学校との結びつきも強かった。そのため、「付近小学校の教員研究会には必ず不中教諭の講話研究指

導のないことはなく」とあるように、小学校教員の研究会に不動岡中学校の教員を積極的に講師として招聘したのである。

また、不動岡中学校では教員同士の結びつきだけでなく、生徒にも還元していた。それは、「課外講話として三俣小学校長角田氏はじめ付近小学校長を講師として農村教育についての講話」を生徒たちに聞かせる取り組みであったことが記事からわかる。

前述したように、不動岡中学校は農村幹部養成機関としての機能も持っていた。毎年多くの卒業生が埼玉県師範学校第二部へ進学して、郡内小学校教員になっていく状況も踏まえると、付近小学校長による農村教育の講話は有益な取り組みだったといえる。

さらに、不動岡中学校では小学校児童への直接的な働きかけも行っていた。生徒の勤勉善行の奨励の一方法として1917（大正6）年創設された「校友会表彰規程」では、第6条で「開校記念日の小学校選手競技に於ては本選手一等級に入りたる者に限り銅牌を与ふるものとす」、第7条で「校友会各部の主権に係る小学校等の競技会に於ては其優勝首位者に銅牌以下を与ふるものとす」とされている¹⁸。開校記念日や校友会各部主催の小学校選手競技で選手を表彰するなど、中学校側からの連携が地域小学校の児童にも目に見える形で行われていた。

以上、大正末頃から農村教育や小学校教員研究会に不動岡中学校教員の派遣が盛んに行われ、中学校の生徒や小学校の児童にも直接関わる取り組みが展開され、中学校と小学校の間でさまざまな連携が行われていたとわかる。

3. 不動岡小学校の郷土教育

前節までは、主として中学校側から小学校への関わりを分析してきたが、本節では小学校側からの連携を検討する。不動岡中学校が位置していた不動岡村には、不動岡小学校があった。同校は、学制発布の翌年に創立され、不動岡中学校周辺でも最も伝統ある小学校の1つである。表4からもわかるように、地域の発展に伴う人口増加とともに、明治末には8学級編成であった同校は、終戦時には2倍の16学級にまで増えている。不動岡小学校と不動岡中学校は距離的にも近く、早くから密接な関係を持っていた。農村教育や小学校教員研究会に不動岡中学校教員の派遣が盛んに行われていたことから、距離的にも近い不動岡小学校との関係性は強かったと考えられる。本節では、不動岡中学校と直接あるいは間接的に影響があったと考えられる不動岡小学校の郷土教育を取り上げて検討する。

不動岡小学校では、1932（昭和7）年に『吾が校の郷土教育』（北埼玉郡不動岡尋常高等小学校、1932年8月）と『吾が不動岡町』（北埼玉郡不動岡公民学校、

表4 不動岡小学校沿革(創立から戦前期まで)

1873 (明治6) 年	3月	不動岡村総願寺に設立し不動岡学校と称す (不動岡、岡古井、町屋、下三俣の各村合併して設けたものである)
1877 (明治10) 年	9月	新校舎落成開校 位 置 不動岡村388番地 建 坪 154.5坪 建築費 3,200円 (この校舎は和洋折衷で当時埼玉県下で最も進歩した建築と称せられた)
1884 (明治17) 年	10月	郡立中学校と校舎をそのまま交換して使用す 位 置 不動岡村168番地 建 坪 113坪 (含付属建物)
1886 (明治19) 年	4月	不動岡尋常小学校と改称す
1908 (明治41) 年	4月	義務教育の修業年限6ヵ年となる (5学級編成)
1909 (明治42) 年	4月	新校舎落成し移転す (6学級編成) 位 置 不動岡村798番地 建 坪 189坪 建築費 6,000円
1912 (明治45) 年	4月	高等科を併置し不動岡尋常高等小学校と改称す (8学級編成)
	5月	総願寺境内竈堂を仮教室として使用す
	12月	校旗制定
1914 (大正3) 年	3月	西校舎増築竣工 (4教室) 建 坪 84坪 建築費 3,400円
1916 (大正5) 年	4月	9学級編成
1918 (大正7) 年	4月	10学級編成
1921 (大正10) 年	4月	11学級編成 総願寺境内竈堂を仮教室として使用す
1922 (大正11) 年	4月	12学級編成
1923 (大正12) 年	5月	北棟校舎増築竣工 (5教室) 建 坪 144.5坪
1931 (昭和6) 年	1月	尋常科1、2年教室に暖房装置をなす
	4月	13学級編成
1932 (昭和7) 年	8月	『吾が校の郷土教育』『吾が不動岡町』発行
1934 (昭和9) 年	4月	14学級編成
1941 (昭和16) 年	4月	小学校令改正、不動岡国民学校と改称す
1944 (昭和19) 年	4月	15学級編成
1945 (昭和20) 年	4月	16学級編成
	8月	校舎の一部を兵舎に転用す

(加須市立不動岡小学校開校百年記念祭実行委員会『開校百年記念誌』加須市立不動岡小学校開校百年記念祭実行委員会、1973年より筆者作成)

1932年8月)を編集し、郷土教育について取りまとめている。表5は、『吾が校の郷土教育』の目次をまとめたものである。『吾が不動岡町』は、『吾が校の郷土教育』の「(3)郷土教育資料の調査」部分を掲載したものである。序と目次が異なるだけで、内容は同じである¹⁹。埼玉県では、実業補習学校を公民学校と称して運営していた²⁰。公民学校の教員は、その多くが小学校との兼務であり、不動岡公民学校においても同様であった。不動岡小学校の教員は、小学校における郷土教育はもとより、公民学校に通う青年たちにも郷土教育が必要と考えて『吾が不動岡町』を編集したものと考えられる。

『吾が校の郷土教育』は、表5にあるように「(1)吾が校の郷土教育観」「(2)郷土教育の実際方案」「(3)郷土教育資料の調査」の3部から構成されている。「(1)吾

が校の郷土教育観」では、不動岡小学校教員たちの考える郷土教育観が示されている。「(2)郷土教育の実際方案」では、同校における郷土教育実践の具体的な方針とその内容が記されている。各教科による郷土化の方法についてもそれぞれ明記されており、どのような方針で具体的に郷土教育をしようとしていたのか見て取れる。「(3)郷土教育資料の調査」は最も多くのページを割いており、歴史、自然、土地、戸口労力、産業、需給物品、財政経済、交通、自治機関、各種団体、教育、兵事、生活、衛生、伝説、郷土民の思想、年中行事、農家歴の18項目にわたって網羅的に不動岡町の郷土調査をした結果が詳細にまとめてある。この『吾が校の郷土教育』と『吾が不動岡町』は、郷土教育を実践していく上での基礎的な資料を作る目的で、教員たちが夏休みを使って調査し、まとめあげたものであった。

表5 『吾が校の郷土教育』の構成

(1)吾が校の郷土教育観 存在的郷土教育観より実在的郷土教育観へ 実在的郷土教育観より理念的郷土教育観へ
(2)郷土教育の実際方案 1. 方針 2. 方法 (1)郷土教育資料の調査 (2)郷土室の経営 (3)郷土講話の実施 (4)郷土読物の編集活用 (5)郷土の実業実習 (6)各科教授の郷土化
(3)郷土教育資料の調査 1. 郷土の歴史 2. 郷土の自然 3. 郷土の土地 4. 郷土の戸口労力 5. 郷土の産業 6. 郷土の需給物品 7. 郷土の財政経済 8. 郷土の交通 9. 郷土の自治機関 10. 郷土の各種団体 11. 郷土の教育 12. 郷土の兵事 13. 郷土の生活 14. 郷土の衛生 15. 郷土の伝説、その他 16. 郷土民の思想調査 17. 郷土の年中行事 18. 郷土の農家歴 19. 生活科資料配当一覧表

(北埼玉郡不動岡尋常高等小学校編『吾が校の郷土教育』北埼玉郡不動岡尋常高等小学校、1932年8月)

こうした郷土教育の方針と調査をもとに、同校では独自のカリキュラムを策定している。それが表6の「生活科資料配当一覧表」である。同カリキュラムが『吾が校の郷土教育』の中で「生活科資料配当一覧表」と呼ばれ、「生活科」の名称を用いているのは大正新教育運動の影響と考えられる。小原国芳らの率いる成城小学校の影響を受けた埼玉県の教師は多く、1921（大正10）年から1924（大正13）年まで不動岡小学校の校長を務めた甘楽雪之丞もその一人であった²¹。大正期から新教育運動に積極的だった同校は、それまでの実践を発展させて昭和戦前期に「生活科資料配当一覧表」を作りあげ、郷土教育運動を進めていった。

同カリキュラムの特徴は、学年が進むにつれ、郷土の自然体験を踏まえた自然認識から社会認識へと段階的に移行するよう作成されている点にある。尋常科第1学年から第4学年までは、郷土の自然観察を踏まえた自然認識育成、町名の由来でもあり地域のシンボル

的存在である不動尊（不動ヶ岡不動尊總願寺）の理解に力点を置いていることがわかる。尋常科第5学年から高等科に進むにつれ、駅、銀行、工場、役場、信用組合、郵便局、青物市場、町会、会社、警察署など、社会機能に関する認識を深める内容となっている。『吾が校の郷土教育』という冊子のタイトルでありながら、「郷土科」ではなく「生活科」という名称を用いて、子どもたちの生活認識を軸として郷土を総合的にとらえさせようとするカリキュラムの配当表を掲載しているのは、大正新教育期に同校が作りあげてきた実践を基盤に郷土教育を展開しようとした証左といえる。

この「生活科資料配当一覧表」には、尋常科4年と5年の第2学期に「不動岡中学校参観」「不動中学校見学」が組み込まれている。郷土教育の1つとして不動岡中学校参観・見学が行われ、小学校と中学校が連携して郷土教育を実践していたことがうかがわれる。こうしたことがカリキュラムに組み込まれたのには、大きく3つの理由があったと考えられる。

第1には、進学者が中学校について学ぶ機会をつくるためである。進学を考えると、意識づけする上でこの時期に地元にある中学校を参観することは、子どもたちにとって有益であったと思われる。

第2に、進学をしない子どもたちが地元の中学校をよりよく知る機会をつくるためである。当時、中学校に進学できる子どもたちは少数であった。したがって、不動岡小学校の教師たちは進学者のためだけに中学校参観・見学を実施しようと考えたわけではなかった。郷土に中学校が存在する意味や誇りを知ってほしいと考えたからである。不動岡中学校は県下最古の中学校であるが、設立当初は県立ではなく私立の学校であった。明治期に、地元の篤志家たちを中心にして、地域の人々から寄付を募って設立した「郷土の中学校」であった。そうしたことから、前述したように不動岡中学校は地域との結びつきが強かった。県下にある他の中学校はもともと大きな町にあったが、不動岡町は1928（昭和3）年に町となった地域であり、ほとんど周辺は農村だった。そのような地域に自分たちがつくった県下最古の中学校があることは、地域住民にとって大きな誇りであった。下記は1936（昭和11）年に行われた創立50周年の記念式時の様子であるが、全町あげて祝意を表してくれ、地域に支えられていた学校であったことがよくわかる。

本校の祝賀に歩調を合わせて地元の不動岡町が全町を挙げて、祝意を表してくれたのは誠に気持ちがいい事であった。アーチを作り紅白の幕をはって、校前を飾ってくれた上に花火やら花車やらの余興も賑わしく、各戸毎に旗を立て万国旗を飾り三日間の大売出しもまことに賑わしく、ことに十一日にはこの地方特有の「さゝら舞」を催して祝意を表してく

表6 生活科資材配当一覧表 不動岡中心郷土自然及郷土文化生活

	第1学期	第2学期	第3学期
尋1	1. 自然観察 総合的未分化的 2. 不動尊詣り 3. 不動岡町見学 4. 田植観賞	1. 自然観察 総合的未分化的 2. 交通機関見学 3. 牛舎見学 4. 不動尊詣り	1. 自然観察 総合的未分化的 2. 不動尊縁日詣り 3. 表忠碑礼拝
尋2	1. 自然観察 総合的未分化的 2. 不動尊詣り 3. 花園観賞 4. 不動岡町見学	1. 自然観察 総合的未分化的 2. 稲荷社詣り 3. 不動岡公園水族観賞 4. 不動尊詣り	1. 自然観察 総合的未分化的 2. 不動尊縁日詣り 3. 通殿社詣り
尋3	1. 自然観察 郷土直観中心 2. 稲荷社参り 3. 不動岡町文化施設・見学	1. 自然観察 理科的郷土直観中心 2. 通殿社詣り 3. 郷土伝説	1. 自然観察 理科的郷土直観中心 2. 八幡社詣り 3. 郷土伝説
尋4	1. 自然観察 地理的郷土直観中心 2. 不動尊・宝物拝観 3. 皇月観賞	1. 自然観察 地理的郷土直観中心 2. 不動岡中学校参観 3. 玉敷神社ノ御神楽及神話	1. 自然観察 地理的郷土直観中心 2. 不動岡文化史物語 宗教教育中心
尋5	1. 不動尊ノ開祖、開宗、 開山者物語 2. 養蚕飼育場見学 3. 蚕病予防事務所見学 4. 加須駅見学 5. 自動車会社見学	1. 不動岡中学校見学 2. 加須銀行、無尽会社見学 3. 精米所見学 4. 印刷所見学 5. 足袋工場見学 6. 千方神社参拝	1. 酒造見学 2. 劇場見学 3. 染色工場見学 4. 製綿工場見学 5. 龍蔵寺見学
尋6	1. 役場見学 2. 信用組合見学 3. 郵便局見学 4. 龍興寺史跡見学 5. 私市城趾見学	1. 青物市場見学 2. 紡績工場見学 3. 武州製糸見学 4. 乾繭場見学 5. 不動岡中心文化史講話	1. 不動尊ニ関スル調査 2. 町会見学
高1・2	1. 町会見学 2. 養鶏、養蜂所見学 3. 果樹、蔬菜、花卉、農園等見学	1. 電気会社見学 2. 変圧所見学	1. 耕地整理及水利状況見学 2. 警察署見学

(北埼玉郡不動岡尋常高等小学校編『吾が校の郷土教育』北埼玉郡不動岡尋常高等小学校、1932年8月。北埼玉郡不動岡公民学校『吾が不動岡町』北埼玉郡不動岡公民学校、1932年8月より筆者作成)

れた。又学校付近の方は多数来校されご協力いただき、学校は非常な便利を得たのである²²。

第3に、中学校側にとっても小学校との結びつきを強めることができたためである。前述したように、不動岡中学校では毎年多くの卒業生が埼玉県師範学校第二部へ進学し、郡内小学校教員となっていた。付近小学校長を講師として招き、農村教育についての講話を生徒たちに聞かせる取り組みも行っていた。こうしたことから、中学校側にとっても小学校との結びつきを強めることのできる参観は、望ましい取り組みであった。それゆえ、小学校における実践に中学校側も協力したのである。

おわりに

農村の郷土教育を国家の教化政策、あるいは連盟理論の受容対象と捉えられてきた従来の研究に対し、農村旧制中学校では、「農村幹部」養成に力点を置き、地域小学校と連携しながら主体的な実践を行っていたことが不動岡村の事例を検討することによって明らか

となった。旧制中学校では、中等教育的機関・小学校における郷土教育とは異なり、「農村幹部」養成に1つの特徴があった。戦前の複線型教育制度のもとで旧制中学校は、旧制高校・旧帝国大学へと進学可能なエリート養成コースと先行研究においてとらえられてきた。しかし、農村の旧制中学校は地域社会の課題に焦点をあてた教育実践を行っていたことから、本稿はこれまで論じられてきた役割と異なる側面を描き出した。不動岡中学校では早くから農業に関する実業教育を施し、「農村幹部」養成にも力点を置いて教育が行われていたのである。

不動岡中学校と不動岡小学校では、校種による違いもあり、郷土教育的取り組みの推進方法は異なっていた。不動岡中学校では、実業教育を導入していく過程で郷土教育的取り組みを重視していった。不動岡小学校では、大正新教育運動期において作りあげてきた実践を基盤にして、「生活科」カリキュラムを策定し、郷土教育を展開していた。両校はこうした実践を背景に、郷土教育的取り組みを発展させて、つながりを深めていったのである。中学校側では、小学校教員の研究会に講師として出席した。生徒たちに農村教育の理解を

深めさせるために小学校教員を招いて講話を聞かせる取り組み、開校記念日や校友会各部主催の小学校選手競技で表彰する取り組みなども行われていた。小学校側では、「生活科」カリキュラムに不動岡中学校の参観・見学を組み入れて郷土教育の内容編成をしていた。中学校側と小学校側それぞれからの取り組みがあり、教師同士の交流だけでなく、児童・生徒との交流も図られていたことがわかる。そうした連携を可能にしたのは、不動岡中学校の卒業生が郡内小学校の教員になっていったことによる人的つながりがあった。

本稿では、中学校と小学校双方の働きかけによる連携に焦点をあてたため、具体的な授業等については十分検討ができなかった。この点は、今後の課題としたい。

註

- 1 こうした二項対立論による主要な研究として、次のものがあげられる。青野春水「社会科教育の源流—昭和初年の郷土教育」、日本社会科教育研究会『社会科研究』第15号、1967年。海老原治善『現代日本教育実践史』明治図書、1975年。田嶋一「1930年代前半における郷土教育論の諸相—文部省・師範学校系、郷土教育連盟系の郷土教育運動と、柳田国男による批判」、東京大学教育学部教育史・教育哲学『研究室紀要』第2号、1975年。久木幸男「郷土教育論争」、久木幸男・鈴木英一・今野喜清編『日本教育史論争史録』第2巻・近代編（下）、第一法規出版、1980年。
- 2 伊藤純郎『郷土教育運動の研究』思文閣出版、1998年。
- 3 外池智『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究』NSK出版、2004年。
- 4 板橋孝幸「昭和戦前期農村小学校教師による郷土教育の展開」『地方教育史研究』第27号、2006年。
- 5 板橋孝幸「昭和戦前期郷土教育におけるカリキュラム改造と村内教育体制構築の構想」『社会科教育研究』第108号、2009年。
- 6 板橋孝幸、佐藤高樹「農村小学校の学級経営と村教育会—宮城県名取郡中田村を事例として—」、梶山雅史編著『近代日本教育会史研究』、学術出版会、2007年。
- 7 中等教育的機関とは、正規の中等教育機関である旧制中学校、高等女学校、実業学校とは別で、小学校卒業後に勤労青少年が学んだ実業補習学校・青年訓練所（のちに青年学校）等を指す。宮城県中田村では、実業補習学校・青年訓練所（のちに青年学校）とは別に高等小学校卒業を要件とし、「農村幹部」の養成を目的として中田中等学園という独自の教育機関を勤労青少年向けに設置して

いた。こうした教育機関を総称して、本稿では中等教育的機関とする。

- 8 新井淑子『埼玉の近代教育史と不動岡高校百年の歩み』埼玉新聞社、2011年、212ページ。
- 9 前掲、新井淑子『埼玉の近代教育史と不動岡高校百年の歩み』、256-257ページ。
- 10 埼玉県立不動岡中学校内創立五十周年祝賀協賛会編『開校五十年史』埼玉県立不動岡中学校、1936年、65ページ。
- 11 前掲、埼玉県立不動岡中学校内創立五十周年祝賀協賛会編『開校五十年史』64ページ。
- 12 同上
- 13 前掲、埼玉県立不動岡中学校内創立五十周年祝賀協賛会編『開校五十年史』66ページ。
- 14 同上
- 15 前掲、板橋孝幸「昭和戦前期郷土教育におけるカリキュラム改造と村内教育体制構築の構想」『社会科教育研究』第108号。
- 16 板橋孝幸「昭和戦前期郷土教育における文部行政の動向と小学校の実践—公民教育の位置付けに着目して—」『公民教育研究』第20号、2013年。
- 17 東京日日新聞、1926（大正15）年12月5日。
- 18 埼玉県立不動岡高等学校創立百周年記念誌編集委員会編『創立百周年記念誌 不動百年』埼玉県立不動岡高校創立百周年記念事業協賛会、1985年、373ページ。
- 19 正確には、『吾が校の郷土教育』の目次は、「13. 郷土の生活」が「18. 郷土の農家歴」の次に記入されているが、本文は項番号の順序で掲載されている。「19. 生活科資材配当一覧表」の表記は目次にないが、本文中には掲載がある。表5は、『吾が校の郷土教育』の目次をもとに、「(3)郷土教育資材の調査」の部分だけ『吾が不動岡町』の掲載順にして全体を整えた。以上を踏まえると、『吾が校の郷土教育』を作成した後に、訂正箇所を直して『吾が不動岡町』が作ったと考えられる。
- 20 田丸淳哉『埼玉県における戦前の公民教育—大正末から昭和初期の実業補習学校を中心に—』埼玉県教育委員会長期研修教員報告書、1992年。
- 21 石井昇『大正・昭和の「新教育」の実践—その栄光と挫折—』さきたま出版会、2000年、75ページ。
- 22 前掲、埼玉県立不動岡高校創立百周年記念誌編集委員会編『創立百周年記念誌 不動百年』、156ページ。

*本稿は、「戦前農村旧制中学校の郷土教育における人材育成の研究」（2010～2013年度科学研究費補助金（若手研究(B)、課題番号22730603））の研究成果の一部である。